

JA東西しらかわ

猛暑の中、福島夏の夏秋産地で奮闘する

「桃太郎ブライト」

(編集部「取材・文・撮影 三好かやの」)



↑「ハウスが40℃を超える猛暑の中、『桃太郎ブライト』はよく頑張っている」と話す、和知喜一支部長。



→ JA東西しらかわでは、管内で採掘されるミネラル豊富な鉱物資源「みりよく満点貝化石」を施用している。



↑JA東西しらかわの「みりよく満点トマト」。6月上旬～10月末まで、首都圏を中心に出荷される。



地域概況

地元産の貝化石を使った「みりよく満点トマト」

福島県中通り地方の最南端、白河市を訪れました。かつては葉タバコの栽培と養蚕が盛んでしたが、1985年に誕生したトマトの品種「桃太郎」をいち早く導入した地域でもあります。

現在JA東西しらかわの管内では、トマト、キュウリ、ニラなどを生産されていますが、ミネラル分として地元産の山から産出される貝化石が主成分の土壌改良剤、土づくり資材を活用。そこから生まれる夏秋トマトを「みりよく満点トマト」と名付け、全国の消費地へ送り届けています。

5年前から耐病性品種へ移行

「今から40年ほど前、私の父が葉タバコからトマトに切り替えて、2017年に私が受け継ぎました」

と話す和知喜一さんは、JA東西しらかわトマト専門部会の中支部長。

トマト専門部会中支部の会員は23名。中支部では合わせて5・8haで夏秋トマトを栽培中です。

喜一さんがトマト栽培を始めたところ、主力品種は「桃太郎8」でした。ところが2020年ごろから、トマト黄化葉巻病の症状が福島県でも見られるようになり、耐病性のある「桃太郎ホープ」と「桃太郎ピース」へ移行し、今年から新たに「桃太郎ブライト」を導入しています。

4月上旬に「桃太郎ブライト」を定植。その3週間後に「桃太郎ホープ」を植え、6月上旬から収穫が始まります。

「桃太郎ブライト」は従来の耐病性品種よりも葉が小さく、葉かきや芽かきなどの管理作業が楽で、しっかりと防除の薬剤が展着すると感じています。

「1〜3段目までは大きな玉がとれていて、1と2Lサイズが中心。秀品率も高く、7月半ばまで調子よく出荷していました」(喜一さん)



↑ トマトとキュウリを栽培する和知朗寿さん(左)と、JA東西しらかわ中部営農センターの藤田茂さん。



↑ 4月上旬に定植した7月末の「桃太郎ブライト」。酷暑の中、防除を続けながら毎日収穫している。



↑ 粘着性の黄色い捕虫テープをマルチの上に設置。涼しい場所に集まるコナジラミの習性を利用して、効率的に捕獲。



↑ パイプハウスの前面、天井まで防虫ネットを張ることで虫の侵入を防ぎながら、風通しをよくしている。



← 「桃太郎」が開発された約40年前から栽培。「みりよく満点」ブランドとして、夏秋トマトを出荷している。

猛暑でも黄変果の少ない「桃太郎ブライト」

7月末、外気温は38℃でハウス内は40℃を超えてきます。そこへ黄化葉巻病を媒介するコナジラミ対策として、ハウスに0・4mm穴の虫除けネットを張ると、風通しが悪くなり室内は50℃近くに。これはたまらなると1mm穴に変えると、コナジラミが侵入する…：そんな悪循環が起きているのです。

『桃太郎ホープ』『桃太郎ブライト』も耐病性品種ですが、JA東西しらかわの藤田茂さんによれば、「外気が35℃を超えるるとさすがに樹が弱り、黄化葉巻病に打破されてしまうので、みなさん苦労されています」

そこでJA東西しらかわでは、コナジラミ対策として気門封鎖剤「フーモン」・殺ダニ剤「サフォイル乳剤」、殺虫殺菌剤「サンクリスタル乳剤」の3種を期間限定特別価格で提供し、防除の徹底を推進しています。

加えて新しく導入した「桃太郎ブライト」は、高温による黄変果の発生が少ない「スムカラ(スムーズカラーの略)シリーズの品種なので、黄変果による販売先からのクレームもなく、安心して出荷できるのが強みです。

「桃太郎ブライトで高温期を乗り越えて、高値で販売できる9〜10月まで出荷し続けたい(喜一さん)。」

そして11月から「やわらくておいしい」と評判のニラ栽培が始まります。

捕虫テープは足元へ 防虫ネットは全面に

続いて和知朗寿さんのパイプハウスを訪れました。2022年に新規就農し、キュウリとトマトを栽培しています。トマトの栽培は2年目で、「桃太郎ブライト」を導入していますが、やはり猛暑の影響で花つきが悪く、コナジラミの影響も防ぎきれません。

そこで練られた策は、株元のマルチのすぐ上に黄色い粘着性の捕虫テープを割り箸で固定して設置。

「コナジラミは涼しいところへ移動する習性があるので、上に張るよりも、株元近くの方がずっとたくさん捕まいます」

コナジラミはテープで捕獲して、ハウスは側面から入口の天井までネットを張り風通しをよくする、樹勢を保つために葉面散布を欠かさない…。物理的な防除や環境改善など、工夫とアイデアを凝らして猛暑による病虫害を抑えています。

「品種や防除はもちろん、これからは天敵剤の導入も検討して、総合的な対策を考えたい」と藤田さん。

猛暑がトマトにもたらす病虫害をいかに抑え込むか。歴史ある夏秋トマトの産地が、温暖化がもたらす課題に果敢に挑んでいきます。